



2023年度震災復興支援基金
「パール未来花基金」助成グループ報告会

福島こども保養プロジェクト

@練馬記録グループ



パルシステム東京 震災復興支援基金「パル未来花基金」

「組合員への助成活動レポート」

震災復興支援基金「パル未来花基金」の助成を受けて、復興支援活動に取り組みました。その取り組みについて、組合員の皆さんにご報告します。

グループ名	NPO法人 福島こども保養プロジェクト@練馬 記録グループ
支援対象者・エリア	福島県
企画開催地	東京都練馬区
企画名称	福島のこどもの保養キャンプなど1年の活動報告作成事業
実施期間	2023年4月1日～2024年3月31日

支援活動の目的・内容・感想

(どうしてこの活動をはじめたのか、どのようなことに取り組んだのか、取り組んだ感想など)

目的

2011年東京電力福島第一原子力発電所の事故後、福島県をはじめ放射線の高い地域に暮らしている子どもたちに、少しでも線量が低い地域でたっぷり外遊びをしてもらい、心身のリフレッシュをはかってもらいたいと考えている練馬区民が集まり、任意団体として2011年6月に設立。その後、より継続的な活動をするため、2013年9月にNPO法人化。

今年度の取り組み

(保養キャンプ) コロナ禍により2020年、21年は実施できなかったが、22年より規模を縮小して実施している。23年は、コロナがまだ終息というわけではなかったが、昨年の経験を活かしながら、夏の保養キャンプを行う。南相馬市より4家族子ども7名、大人5名が参加した。

事前に参加者・スタッフは直前の抗原検査、また消毒や間隔をとった食事など感染対策を徹底した。プログラムでは、広い庭での虫捕りや川遊び、木工教室、音楽プログラム、花火や竹キャンドルなどを企画実行した。食事については、スタッフを必要とする自炊を減らし、飯能地域の弁当やデリバリー、キッチンカーなどを活用し地域の活性化にもつながった。大平ハウスのある飯能市中郷地区の皆さんには、自治会をはじめ川遊びの河原やスタッフの宿泊所などを気持ちよく貸していただき大変お世話になっている。

(その他の活動)

練馬区にある滞在型保養ハウスが10年を迎え、福島からの利用者が継続していること、練馬区に住む福島県からの避難者につながる場としても利用されている。さらに、2024年1月には震災・原発避難者はいまPART9「東京電力福島第一原発災害を語り継ぐ～福島の声をあなたへ～」の講演会を練馬区で実施した。原発震災を語り継ぐ会主宰で東日本大震災原子力災害伝承館の語り部として活躍されている高村美春さんを講師としてお招きした。原発災害からの避難者で保養活動の主催者である鹿目久美さんにもお話いただいた。会場での参加は40名、Zoom17名の合計57名の参加があった。震災当時を振り返るとともに、今後も保養活動と原発被害者の方の声を伝えていく講演会活動の重要性を再認識し、今後に向けての取り組みを確認した。

(取組みと感想) 昨年の12月にNO6、年が明けて3月にNO7のにゅうすれたーを発行、配布することができた。震災から13年経つが、区内に住む避難者の方と滞在型保養ハウスでの交流を行い、今後につながる一歩となっている。若い世代に伝えていくためにも「保養」の意義をとらえなおし、活動を展開していきたい。

活動の様子（写真など）

2023年8月4日～7日 保養キャンプ（川遊び） 埼玉県飯能市





震災・原発避難者はいま Part 9

東京電力 福島第一原発災害をかたりつぐ～福島の声あなたへ～

2024年1月27日 練馬区民・産業プラザ



※本レポートに掲載された写真はパルシステム東京ホームページ等で公開させていただきます。予めご了承ください。

NPO法人 福島北光保養プロジェクト @ 練馬
にやうす・れたー
No.6

特集：飯能保養キャンプ 2023

新型コロナウイルスの緊急事態宣言は解除された
とはいえ感染対策で緊張しながら手探りで
再開した去年の飯能保養キャンプ。

今年は少し緩和されたとはいえ、食事は
やはりキッチンカーなど工夫しながらもで
きるだけ手作りの食事へ、スタッフも大平
ハウスで密にならないよう別の宿泊場所を
準備したり模索を続けました。

一方、たくさんの学生スタッフの参加や、
震災・原発事故直後には未就学であったお
子さんが高校生となってスタッフで参加し
てくれたりうれしいこともたくさんあった
キャンプでした。

ALPS処理汚染水の海洋放出、帰還
困難区域での避難解除、先のみえない廃炉
作業などまだまだ不安の材料があるなかで、
福島から参加される親子の心身のリフレッ
シュに少しでも役立ち、ひとの輪がひろが
り続ければと開催した今年の保養キャンプ。
支えてくださったみなさまに感謝の気持ち
を込めて報告集をお届けします。

NPO法人福島子ども保養プロジェクト@練馬 理事

宮下智行

飯能サマーキャンプの 開催に寄せて



福島子ども保養プロジェクトによる「飯能
サマーキャンプ」が今年も開催できましたこ
と、とてもうれしく思います。飯能市の豊か
な緑と清流に囲まれた自然の中でたくさん
子どもたちが、川遊びやスイカ割り、バーベ
キューパーティーなどに夢中になって楽しんで
いる姿が目につかびます。

このキャンプは、地域の方々の交流もあ
り、様々な体験をすることで「遊び」だけ
はなく、たくさんの「学び」や「発見」があ
るキャンプだと感じています。

福島子ども保養プロジェクトの皆様におか
れましては、新型コロナウイルス感染症が5
類感染症に移行されたとはいえ、まだまだキ
ャンプを運営する上で様々な苦労があった
ことと思います。それでもまた飯能市でキ
ャンプを開催していただけたことに感謝申し上
げます。来年もたくさん子どもたちの笑顔
があふれる「飯能サマーキャンプ」が開催さ
れることを楽しみにしています。

飯能市長 新井重治

福島子ども保養プロジェクトの 皆様へ



福島子ども保養プロジェクトのスタッフ・ボラン
ティアの皆様努力により今回のキャンプが無事に実
施出来たと思っております。お疲れさまでした。来年
も飯能でサマーキャンプを実施していただきたいと思
います。中藤中郷自治会としましては、自治会館解
放等、出来る限りの支援を行いたいと考えておりま
す。ここからは、参加された子どもたちへのメッセー
ジとします。

飯能の自然の中で虫を捕まったり、川に入ったり、
走り回ったりして遊んだと思いますが、大平ハウスの
周りにはいろんな鳥や動物がいます。オオヨシキリ、
トビ、ジョウビタキ、カワセミ、シラサギ、アオサギ、
フクロウなどの鳥。なかなか見られないムササビ、リ
ス、秋に出てくるシカなどの動物。きれいな川に住む
カジカカエル、数は少ないがホタルなどがいます。見
られたらラッキーです。見られないけど気になった動
物、鳥、虫などは図鑑などで調べると、すがた、かた
ち、色などが分かり面白いですよ。次回も飯能に来て
いろんなものを見て触ってみましょう。子どもは、げ
んきが一番です。

中藤中郷自治会会長 竹元康男

日程 8月4日(金)~7日(月)

1日目
はじめの会
庭遊び
すいか割り

2日目
川遊び
キッチンカー
癒しの時間

3日目
川遊び
キッチンカー
音楽プログラム
癒しの時間
健康相談
すいか割り
庭遊び
星空シアター

4日目
思い出の絵
おわりの会



保養キャンプが
紹介されました！

福島の親子に笑顔 保養の必要性実感

松本に移住の竹内さん自身も立ち上げたNPOキャンプ訪問



音楽を楽しむプログラムに参加し、子どもたちを笑顔で見つめる
竹内さん(奥右から3人目)

2021年に新潟から松本市に移住した同市東部の竹内尚代さん(78)が8月上
旬、自身が生み出したNPO法人「福島子ども保養プロジェクト」の
福島の子どものための「保養キャンプ」に5年ぶりに参加し、豊かな自然の中
で笑顔を持つ子どもやラッキーな様子の母親らの姿を見て、保養の必要性
を改めて実感。一方で、社会の関心は薄れつつあるとし「福島に関心を持ち続け
てほしい」と訴える。

竹内さんは11年7月、市民有
志とともに埼玉県秩父市で初めて保
養キャンプを開催。13年にNPO法
人「福島子ども保養プロジェクト」@
練馬(東京都)を設立し、寄付金
や助成金を原資に毎年夏に保養キ
ャンプを開催してきた。新型コロナで
20、21年は中止したが、昨年から再
開。竹内さんは、移住後自治会の
会議で「モトで参加してきたから
がん治療をしていたことなから参
加は見送っていた」。

全国での実施 減少傾向「関心持ち続けてほしい」

保養キャンプを実施する全国約50
の団体をつくる「311愛全国連
絡会」(甲府市)によると、保養キ
ャンプの実施数は減少傾向。同会
の加盟団体もピーク時の約10団体から
減り、継続している団体もスタッフ
の高齢化や運営資金不足などの課題
を抱えているという。寄付も減り、
担当者は「関心の低下を痛めている
」と訴える。

NPO法人代表の大城資子さん
(69)「東京部には今も保養キ
ャンプのニーズはある」と強調。福島に
とどまるのも難れるのも大変なこ
と。私たちの弱弱いが支援を続け
ていくことが必要だ」と話して
いた。竹内さんは「私も保養キャンプに
関わり続けていく力を込めた」。

太田しのぶ（南相馬市／子11歳、9歳、1歳）

今回2回目、前回から5年ぶりの参加となりました。前回同様、子どもと一緒に夏の素敵な思い出を作ることができた4日間となり、感謝の思いでいっぱいです。

今回は1歳児の娘の参加、さらに上の兄たちも年頃ということで行きたい！という反応ではありませんでした。しかし、私が行きたくて、主人と息子達に伝え、さらにスタッフの方から主人に電話で話しをしていただき、参加までたどり着くことができました。本当にありがとうございました。川遊び、キャンプ、音楽プログラム、製作、遊びの中で子どもの五感を養うプログラムが満載でした。家で夏休みにやろうと思っても絶対できません。また、大学生やスタッフの方々がもれなく良い方ばかりです。上の息子達はどちらかというところ見知りな方で、すぐにみんなと仲良くとはいかなかったかな。いろいろな年齢の人との共同生活は刺激になったり、人との接し方などを学べたり、いい経験になったと思います。1才の娘を連れての参加で、少し不安があ



西村ユウ子（南相馬市／寛人6歳）

2023年の保養は、コロナ前の4年ぶりの参加となりました。前年度から保養が再開されていたのは知っていましたが、参加人数が前より制限されている事と、2回目の参加と言う事で躊躇しました。しかしながら、再度練馬保養のスタッフの方々に逢いたい！と、ダメ元で申込みさせて頂いた次第でしたが、願いが叶い再び母子2人の参加となりました。

自宅近くまで（3泊4日の荷物なので、そこも有難い）迎えに来てくれたバス会社のバスで保養へ向かう事に。バスの移動と言う事で、それだけで行く事に少し不安がっていた子どもの気分も晴れて、これからのキャンプへの期待は半端なくなっていました。非日常の事柄に、子どもは移動時間をも楽しんでたようでした。また、DVDなどの準備もして頂いていたので、大人も長時間の移動も苦にならなかつたです。（心配した車酔い等も皆さんしませんでした）保養所にバスが到着した駐車スペースに、スタッフの皆様の温かなお出迎えに感慨ぶかきを感じました。又、

りましたが、スタッフの方々の優しい気遣いや配慮が完璧でした。離乳食の準備、お風呂のお手伝い、様々な声かけに安心して4日間を過ごすことができました。

保養目的のプロジェクトですが、実際には母親のリフレッシュ、子どもの自然体験メインで、親子が向き合える時間をとることができます。家にいると子どもと接する時間がないのですが、ここでは家事の心配をせずに、子ども中心の生活を送れたこと、癒やしの時間で気持ちに余裕ができること、本当にありがたかったです。三度の食事が苦痛ではなく、楽しみで仕方なかったです。保養目的ではなく、世の中のお母さん達に本当に必要な時間だと思います。

また、冷房の効いた部屋でメディア中心の生活をしている子どもにとつて、自然な中で過ごす経験、夏の暑さを忘れるほど遊びに夢中になる時間は、本当に貴重な体験となりました。上の息子達は、涼しい部屋で過ごすことになれてしまい、夏の暑さに耐えられない体になっているのではないかと不安です。本当のキャンプを数日間体験し、どんな場所でもどんな人でも生きていけるサバイバル精

大平ハウス迄の道すがら4年前の記憶を辿りつつ、子どもに覚えている？とお話しながら歩いて向かい、途中の橋ではここで川遊びしたんだよー。明日が楽しみだねー。と、自然にいつもの環境に、早くも来れて良かったなとホッとした事を覚えています。

保養中、一人っ子の子どもの手を離れ、年の近いお兄さん&お姉さんに遊んで貰って仲良しに。そして、キャンプに参加していた同年代の子とも仲良くなり、一緒に遊んでいる姿に成長を実感した瞬間でした。

例年になく猛暑日が続く時期でしたが、家族単位で部屋割りして頂いたので、子どもも落ち着いて寝る事が出来たようで、前回のように熱中症にならずに過ごせました。色々配慮して下さいありがとうございました。

私的にはスタッフの方の体調やコロナ対策も考えたキッチンカーでのランチが、初めて利用するのは野菜がとても美味しかったので印象に残りました。子どもも完食だったので、思わず写真を撮ってしまいました。

子どもにキャンプの感想を聞いたら、全部楽しかった♡との事でした。絵を描いて貰ったところ、スイカ割りの絵

神をもつと養わせたいぐらいです。

自然の中になくても楽しいことがあふれている便利な世の中ですが、親子にとって本当に大事なことを見つけることができる時間になりました。これもすべてがこのキャンプを迎えるにあたって、たくさんの人たちの準備があつたこと、たくさんの方々の時間を費やしてくださったこと、本当に感謝します。スタッフの方々の素晴らしい優しさと愛に包まれて、今後の生活の活力になったことは間違いありません。またの機会があつたら、息子達と主人の説得をしてでも是非参加したいと思います。ありがとうございました。



を描いていたので、大人数が集まった時ならではのイベントが強く思い出に残っているようです。（3人家族ではしませんが）

福島、特に浜通りと言われている地域は、やっと最近になり全市町村の立入禁止が解除されました。まだまだ立ち入りが出来ない地域や地区はありますが、全市町村の解除が叶ったニュースに、少し明るさを見出した今日この頃です。

改めて思い返してみると、飯能市での保養キャンプは自然盛りだくさんの中で、親が何の憂いもなく、子どもを思いっきり遊ばせられる環境だなと思いました。

日常の様々な不安から守られ、メディアからも距離を置く状況は、まるで田舎の親戚の家にお泊まりにきたような……。

又訪れたいと思える（何らかの形で）良いので、ずっと関わっていきたい）大切な心の支えになる約束の場所です。



4日間大変お世話になりました。

事前の心配事アンケートで、「娘が初めての環境に慣れるまで時間がかかるので」なんて書いたのですが、大城さんにも言われた通り、まったく心配なく、むしろ積極的に色々なことに関わっていたので、そこが一番うれしかったです。

大自然の中で気持ちも開放的になり、スタッフの方々が準備してくださった様々な楽しいプログラムが娘の背中を押してくれたのかな、と思います。正直、初日のしゃぼん玉や水遊びの時に、すでにだいぶはつちやけていたので、「あ、大丈夫だな、」と思っていました^^

そして息子のほうも慣れるまでは……と思っていたのですが、たくさんのスタッフの方が気にかけてくださり、またバディの方も常に見守ってくれて、一緒に手をつないだり、抱っこされている姿を見て、ちょっとびっくりしたほどでした。

そうやってたくさんの方が見守ってください



W・T、W・E(南相馬市/子Y5歳)

今回の飯能サマーキャンプでは、たくさんの方々に大変お世話になりました。

飯能市とはどこにあるのか、バスでどのくらいのところにあるのかも分からず、息子も「どこに行くの?」「まだ、着かないの?」と到着までは、バスの中で不安げでした。私達夫婦も経験のないことで、多少の不安もありましたが、到着してみるとたくさんの方々に迎えてもらい、荷物も持っていたいただき、不安も吹っ飛びました。暖かく迎えていただき、とても嬉しかったです。

息子は、「バスで泊まりに行つたね。」「虫取り、パパとできて面白かったよ。」「花火もやったね。」「たくさんの思い出ができたよ。」「後日、今までキッチンカーを利用したことがなかったので、「これ、夏のお昼で食べたよね。」「キッチンカーを見つけて伝えてくれました。」「私達夫婦は、息子が少しでも楽しめれば、夏の思い出ができればと思いましたが、保養プロジェクトの皆さんと色々お話をして、福島のこと、原発事故のこと、放射能

らおかげで、「自分が子どもを見なきゃ」という日常からちょっと離れ、少しゆっくりしたり、テルミーでリラククスしたり……と大人にとっても、癒され充実した時間となりました。またお母さん方と、子育てのこととか色々お話できたのも、とても良い機会だったなと思います。



できたらまたキャンプに参加したいです。今度は主人も一緒に！
事前の準備からキャンプ中、そして片付けまで関わってくださったスタッフの方々、本当に大変お世話になりました。ありがとうございました。またいつかお会いできる日を楽しみにしています。

みなさんへ
この前は、おとまりをさせていただきありがとうございました。そのおかげで、日曜日は、とても楽しかったです。お母さん、お父さん、お兄さん、お姉さん、みんな、ありがとうございました。また、お会いできる日を楽しみにしています。あずは

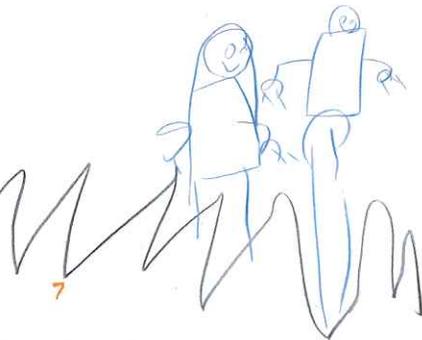


ること、たくさん考えて、話し合っている人もいるということを知り、大切な息子がいる中、私達は実際に南相馬市に住んでいて、原発事故のことを忘れてしまっている、もしくは、自分の記憶に蓋をしまっているけれど、本当は無視できない問題なのかもしれないということ夫婦で話し合いました。そして、息子のためにもこういうキャンプは必要だと痛感いたしました。そういう意味でも私達夫婦はただ楽しかっただけではなく、もう一度、自分たちの生活を見直す良い経験となりました。

特に私は、テルミーを体験し、興味を持ちました。テルミーを施していただきながら、色々、子育てのことを話せ、先輩お母さん達の子どもへの思い、願いなどがとても伝わりました。また、毎日の美味しい食事。そこらも生活クラブというところのジャムや調味料を使用し調理していただき、ここにも感動しました。3泊4日の全てが細かな気遣いと優しさと愛情で包まれていました。

それから、この保養プロジェクトでお世話になったお姉さん、お兄さん、そして大学生の方々。本当に、息子に優しく、息子が楽しめるように一生懸命遊んでいただき、本当に有り難かったです。いつか、息子が大きくなった時に、自分も色々な人から受けた愛情や恩を返すことができるような大人になつてくれるといいなと願っています。このキャンプに誘ってくださった田淵さんは、「子どもの頃はまわりから一杯愛情や好意を受けて育ち、それが十分であれば、後日、人にその貯金を返せるように育つと思う。」と素敵な言葉をくれました。

最後に、私達は夫婦で参加しました。「お父さんが参加してくれるのは嬉しい。」とのことでしたが、子育ては、「常に夫婦で、一緒に。」が私達夫婦の考えです。そして、夫婦でこのキャンプを経験でき、本当に良かったです。今後も私達のように夫婦で参加される方が増えるといいなと思います。



庭遊び

今年の夏、ボランティアとして参加しました。小学校低学年の頃、一度親について保養キャンプに訪れたことがあり、約10年ぶりの参加でした。10年前とても楽しかったことを覚えていますが、大学生として参加しても、あの頃と変わらないあたたかき、輝きがそこにはありません。キャンプでは福島からきたお子さんと水遊びや庭遊びをしました。水鉄砲でびしょびしょになるまで水を掛け合ったり、スイカ割りで大はしやぎしたり、お庭でヘトヘトになるまで鬼ごっこをしたり。普段歳の離れた子どもたちと関わる機会はほとんどないので、子どもたちの笑顔はこんなにも人を幸せにするのか、と思ったものです。きてくれたお子さんを楽しませる、というよりは、一緒に過ごす時間が、私自身とても楽しくて、私の大切な思い出になりました。過ごしたのは短い時間ですが、私にとってこの場所はまた帰りたいと思えるふるさとのような場所になりました。そしてそう思うのは私だけではないと確信しています。あたたかいこの場所が、この先もずっと誰かの居場所であり続けることを願っています！

(井上由菜)

川遊び

保養の初期から川あそびに関わってきましたが、川あそび場としては「釣場」が好きです。「水あそび」ではなく「川あそび」が楽しく手軽にできるからです。まるで子どもたちを迎えてくれるかのように多くの生き物に出会えます。8月5日も期待以上の多様な生きものがいました。トビケラ等の水生昆虫類、ヘビ類、ゴリ類、オタマジャクシ類、サワガニ、魚類。なんと、小さいヘビが現れては10秒ほどで消えました。

川遊びのポイントは「自分から水面にできるだけ顔を近づけて、目、耳、鼻、肌を過敏にして」生きものと出会うことだと思います。知識としてはなく感覚として。生きものに触ることが減ってきている私たちの人生の中で、子どもたちはこれから何回あるのか、釣場だけになるのかわかりません。だからこそ、大平ハウスでの体験は貴重です。そのシーンに少しでもお役に立てるのであれば、老躯にムチ打って、これからもやっていきたいと思っています。

(川じい・菅沢博)

音楽プログラム

昨年引き続き二度目の音楽プログラム。マリンバとピアノのデュオ曲を皆さんに聴いていただくだけでなく、「いっしょに楽しむ」ことを心がけてプログラムを考えました。



身近なもので音を鳴らしてみるコーナーでは、

みんなで小さな音に耳を傾け、オープンマインドで音を聴こう、受け取ろう、という気持ち 皆さんから感じられ嬉しく思いました。「変な音！」だとか「この音好き！」などとそれぞれが思ったことをのびのび表現できる時間とその空間に、私も癒され、楽しく過ごせました。

今後は、歌も入れてもっと楽しみを広げられるといいね、と青木里子さんと話しています。音楽をツールにしてコミュニケーションすることのほかに何か特別なことをしてさしあげるというほどのことは出来ませんが、恵まれた自然の中に集まった皆さんと一緒に楽しむことを続けられたいいな、と思っております。

まかない

参加させていただきありがとうございました。(島崎佳代) 今回は体験することだけでなく、作ることも入れてみました。ペットボトルの中にビーズを入れた「ビーズマラカス」をみんな楽しそうに作っていました。よかったと思います。また来年もよろしく願います。(青木れあ)

コロナ禍により2年開催が見送られ、やっとのことで再開されようとした昨年の保養キャンプには、自身がコロナに罹ったことで更に送り、やっと参加できた今年の保養キャンプ！キッチンカーでの提供など、コロナ前とはまた違って様々なバリエーションでの料理提供となりました！保養に来てくださった皆様は飽きることなく楽しんでいただけたのではないかと思います！



きることなく楽しんでいただけたのではないかと思います！

そして今回も自分が作った料理を美味しくそうに喜んで食べていただき、これだ、この為に来たんだここに、とやっと保養キャンプが帰ってきたんだとしみじみ感じる事が出来ました！またぜひ来年も参加させていただきたいと思っています！(佐藤 光)

今回の賄いは朝食が3日間、夕食の豆カレー。新しくYさんの参加があり大いに助かる。熊本からの安全な野菜、卵、山形の食材をふんだんに使いグッドアイデアの食事作りができた。約束の豆カレーには白なすとピーマンを入れ甘いのと辛いのを作ったが、今回も辛い方に人気あり直ぐに鍋が空っぽになった。しっかりと食べて、しっかりと遊んで、大平ハウスでの夏はいかがでしたか。(片野令子)



保養キャンプにスタッフとして参加して



2回目の参加でしたが、今回は初めて泊まりでの参加ということで、前回に比べてみなさんより深く交流することができました！川でボートに乗ったり、大平ハウスを駆けまわったり、子どもたちと一緒に自分も全力で楽しむことができました！こんなに自然に囲まれる生活をしたことがなかったので、戸惑うこともあったのですがそれ以上に福島のご家族の皆さん・スタッフのみなさんのあたたかさや印象に残るキャンプでした！

(N・F)

今年は2日間参加させていただき、長い時間子どもたちと夏を一緒に満喫できてとても楽しかったです。川遊びだけでなく、キャンドルファイヤーなど私たちが企画したのもやらさせていただき、去年以上に深くスタッフの皆さんや子どもたちと関わる事ができてとても嬉しかったです。

去年は先輩と参加させていただいたのですが、今年は私たちが後輩を連れていき、この福島保養キャンプという活動をサークルで受け継ぐことができて感動しております。今後ともどうかよろしく願います!!

(A・W)

ボランティアとして参加していたので、サポートに徹していましたが、それでも楽しかったと思えるほど夏を満喫しました。参加者の皆さんも同じように楽しんでくれていたら嬉しいです。もしまた参加する機会があったらもっと参加者のみなさんに楽しんでいただけるように頑張りたいと思います。

(R・S)

初めて保養に参加させていただきましたが、活発な子どもたちと接するを通じて、こちらも元気を貰うことができました。川遊びの見守りやボール遊びでは、子どもたちと一緒に大学生である私たちまで楽しんでしまい、とても充実したボランティアとなりました。私は今回日帰りでの参加になりましたが、来年は是非宿泊での参加も検討したいと思います。貴重な体験をさせていただきました。ありがとうございます！

(Y・S)

私は1番最初の回から被災者として保養キャンプに参加していました。今回高校生にな



今回初めて保養キャンプに参加させていただきました。

普段の大学生活では体験できないことを沢山経験することができました。特に川遊びや木を使った工作などが印象的でした。

今の時代、多くゲームなどが普及し、子どもが外で活動する機会が減っています。そのため幼少期に、自然と触れ合う機会を持つことはとても貴重な経験になると感じました。また、私も小さい頃にこういった機会がもつとあれば良かったと感じたので、ぜひ福島の子どもたちだけではなく、他の子どもたちへの保養キャンプ等も増えていったらいいと思います。(A・K)

今年は2日間参加しました。自然豊かな大平ハウスを無邪気な笑顔で走り回る子どもたちと触れ合いながら、僕自身も童心に返って楽しく過ごすことができました。また、今年はスタッフとして初参加の後輩が6人も来てくれました。僕個人としても、保養について携わってくれる人が増え、そこで意見を交わし合えることが出来るようになったことが何よりもうれしいです。来年もまた行こうね！

(H・I)

ボランティアとして参加して、スタッフの方々の思いがより強く見え、被災者の方々がどうやって楽しめるか、リフレッシェ出来るか、を常に考えて動いていました。私が保養に感じた心地よさは、この努力によってなされたものだと思えました。私も今後はボランティアとして関わっていきたいと改めて思います。(坂本八重・高2)

私は、今回2度目の参加だった。昨年は緊張のまま終わったが、今年の保養は楽しみながら参加できた。

普段味わうことのできない貴重な体験をさせていただきました。元気な子どもたちと川遊びをしたり、キッチンカーの美味しいごはんを食べたり、木材を使った工作や積み木など、楽しい思い出がたくさんできました。特に、子どもたちが川で捕まえた様々な生き物たちをまじまじと見ている姿はとても可愛らしく印象的でした。スタッフの皆さんも優しい方たちで、機会があればまた参加したいと思いました。(K・T)

ボランティアとして参加したとは思えないくらい子どもたちと一緒に楽しい時間を過ごすことができたと感じました。今回のように自然を十分に満喫しながら夏らしいことをしたことがなかったので本当に良い思い出になりました！貴重な経験をさせて頂きありがとうございます!!

(R・O)

僕は今年初めて保養ボランティアに参加したのですが、終わった後に大きく残っていたのは楽しかったという気持ちです。もちろん、



都会にはない飯能の澄んだ空気、周囲の深い木々、虫や小鳥たち、参加されたご家族の嬉しそうなお顔が忘れられない。子どもたちは皆とても元気で、一緒に川で様々な生き物を見つけては大喜び、私の知らないことをいろいろ教えてくれ、本当に可愛らしかった。来年も新しい出会いがあることを楽しみに参加したい。

保養キャンプに携わってくださいました皆さま、本当にありがとうございます。(五十嵐孝子)

新型コロナウイルスが2023年5月に感染症法で5類に分類されたため、保養キャンプでも感染対策を再考しました。昨年のような無料PCR検査はなくなったため、抗原検査のみをキャンプ参加直前に全員に実施し、結果を報告してもらうことにしました。区内のある薬局で

感染対策・健康相談

昨年同様手洗いや消毒、風通しを良くする

国の推奨する検査キットをまとめて安く買うことができました。夏場でキットの温度管理が必要なため、その薬局で福島の家族など遠方の方にはチルド便での郵送サービスを提供していただき、大変有難かったです。

この夏はRSウイルス、手足口病、ヘルパンギーナ、溶連菌感染症などが同時に流行し、参加するお子さんたちの健康状態が懸念されましたが、予定の家族が皆参加され無事にキャンプを終えることができました。

健康相談ではお子さんの発達のこと、いくつかの感染症の相談や診察が中心でした。(大内美南)

キャンプにご協力いただいた方々 (敬称略・順不同)

明星 晃・マサ (大平ハウス・大平岩男元後見人)
 新井重治 (飯能市長)
 須田隆行 (飯能市役所秘書室)
 飯能市役所観光・エコツーリズム推進課・生活福祉課
 竹元康男 (飯能市中藤中郷自治会長)
 坂田正義・美香 (川遊び協力)
 成田純子・篠島美咲子 (ほんのうぎときとひろば)
 川野安紀子 (スタッフ宿泊所提供)
 山田 茂 (スモークロッジ飯能の森)
 豊泉正人 (ベジタブルプロモーション)
 富田有花 (熊本県阿蘇村)
 NPO 法人 A P L A (バナナ提供)
 みどり広場運営委員会 (竹キャンドル制作)
 かける薬局上石神井店 (抗原検査キット発送)
 太平観光株式会社 (参加者送迎)
 野村阿悠子 (信濃毎日新聞)
 武蔵大学ボランティアサークル A't

サポートいただいている団体 (敬称略・順不同)

練馬区社会福祉協議会
 練馬区立区民協働交流センター
 環境まちづくり NPO 元気力発電所
 日本基督教団大泉教会
 社会福祉法人つくりっこの家
 江古田映画祭実行委員会
 ギャラリー古藤
 大泉学園町親交会
 大泉スワロー体育クラブ
 オリエンタルハート
 辻格子とその仲間たち
 チェルノブイリ子ども基金
 NPO 法人おちゃ福

サマーキャンプの実施にあたり、以下の皆さまより助成をいただきました。心より感謝申し上げます。

独立行政法人国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」/ 311 受入全国協議会・みんなの希望プロジェクト / LASH チャリティバンク / 公益信託加藤一枝記念福祉奨励基金

スタッフ一覧 (敬称略・あいうえお順)

青木里子・れあ (東久留米市)	伊丹リク (石神井台)	角田一樹 (土支田)	櫻井悠希 (武蔵大学 A't)	日高美南子 (東大泉)
青木節子 (東久留米市)	井上圭子 (西東京市)	角田志麻 (土支田)	島崎佳代 (東久留米市)	藤村喜久子 (東大泉)
青木 良 (東久留米市)	井上由菜 (西東京市)	君垣圭子 (西大泉)	菅沢 博 (南大泉)	古軸 泉 (江東区)
安東洋子 (大泉学園町)	池田 遥 (武蔵大学 A't)	國島さなえ (豊玉北)	杉里直人 (西東京市)	古谷和華 (武蔵大学 A't)
五十嵐孝子 (真井)	上野良子 (日野市)	國島政雄 (豊玉北)	田中航太 (武蔵大学 A't)	宮下智行 (高松)
生田 聡 (田柄)	梅田和香 (小平市)	栗田恵寧 (武蔵大学 A't)	田中辰憲 (入間市)	目黒昭彦 (飯能市)
生田希海 (田柄)	小笠原理央 (武蔵大学 A't)	佐々木隆幸 (武蔵大学 A't)	田中造雅 (南大泉)	山家直子 (氷川台)
生田真汐 (田柄)	大内美南 (豊玉北)	佐藤 光 (横浜市)	田淵英生 (関町南)	横溝優希 (大田区)
生田美樹 (田柄)	大城資子 (東大泉)	佐藤 令 (武蔵大学 A't)	竹内尚代 (松本市)	渡邊茜里 (武蔵大学 A't)
伊丹 高 (石神井台)	片野令子 (東大泉)	坂本八重 (成田市)	中川信明 (北町)	



2023 ニュースレター NO.6

2023 年 12 月発行

NPO 法人福島子ども保養プロジェクト@練馬

〒178-0063

東京都練馬区東大泉 6-36-4-301 大城気付

ホームページ: <http://www.hoyounerima.org/>

Eメール: info@hoyounerima.org

Facebook: 福島子ども保養プロジェクト@練馬

<https://www.facebook.com/hoyounerima/>

寄付はこちらまで

郵便振替口座 00100-4-300449

加入者名 福島子ども保養プロジェクト@練馬



収入	寄付金	291,339 円	通信運搬費 (参加者・ボラ資料郵送他)	
	助成金	1,300,000 円		5,344 円
	計	1,591,339 円	水道光熱費 (大平ハウス)	
支出	食料費	232,823 円	30,000 円	
	旅費交通費 (大平観光、レンタカー他)	553,308 円	衛生費 (抗原検査キット)	
	備品・消耗品費 (花火等)	40,682 円		138,287 円
	保険料 (参加者・ボランティア保険)	22,250 円	賃借料 (スタッフ宿泊所)	
	諸謝金 (川遊び・自然観察・きときと)	132,600 円		83,760 円
			事務費 (印刷・郵送・会議費他)	
				28,449 円
			計	1,267,503 円
			残金	323,836 円



ご寄付をありがとうございました。残金は NPO 法人会計に繰入れ、報告集作成をはじめ、会の活動全般に活用させていただきます。

来年度以降も保養活動が続けられますよう、引き続き皆様のご支援をよろしく願いいたします。

表紙題字 / 竹内尚代 編集 / 青木節子、大城資子、中川信明

デザイン・DTP・ロゴマーク / 柳 裕子

写真提供 / 生田希海、生田美樹、古軸 泉 イラスト / 福島の子どもたち

NPO法人福島こども保養プロジェクト@練馬

にやうすれた-167

今年も東京電力福島第一原子力発電所の過酷事故から14年目になりました。

福島こども保養プロジェクト@練馬を立ち上げたのは2011年夏。私は度々再発する病気で活動できなくなり、環境を変えようと長野県松本市に移住し、3年たちました。

昨年、飯能保養キャンプに5年ぶりに参加できました。懐かしい空気が流れる飯能では、ベテランスタッフを支える若いスタッフの働きに目を見張りました。子ども達が危険な場所に行かないよう、何気なく傍にいて見守りながら子どもと遊ぶ。若い人たちが育ったのは中心になる大人達がいいからだ、キャンプを実施するまでの準備の大変さを思い出しながら、皆さんに感謝しました。若いスタッフは原発事故を記憶していないかもしれません。また福島から参加する若い親子も記憶が薄れているかもしれません。それでも保養キャンプは、双方が繋がることができる貴重な大切な場所だと思います。

この夏も保養キャンプで新しい出会いがあるよう願っています。

NPO法人福島こども保養プロジェクト@練馬 理事 竹内尚代

東京電力福島第一原発災害をかたりつぐ ”福島の声をあなただへ“

当日は、土曜日の夜の時間帯にも関わらず、会場は40名、ZOOMで17名が参加していただきました。

まず、原発震災を語り継ぐ会主宰 高村美春さんから、原発事故当時の緊迫した様子と放射能を避けるために必死で避難をしたお話をいただきました。

南相馬市で高齢者の介護職をしていたときに震災に遭う。電源喪失、そして1号機の水素爆発により、避難指示の範囲が、原発より3キロ、10キロ、20キロと広がり続けたが、同じ南相馬市でも、小高区は避難対象なのに、住んでいた原町区は25キロで対象外であり、情報もない中、自力での判断を迫られることになった。避難できる道を探し、大渋滞の中、幼い子どもさんたちと共にガソリンの残量を気にしながら逃げるも隣の川俣町までしか行けなかったこと。やむ無く自宅に引き返し、子どもさんたちは埼玉に避難させ、自らはまた高齢者施設の仕事に戻るも、スタッフは一人一人といなくなり、残された入居者の目から光が無くなっていく中、所長からもう来なくていいと言われた時に覚えた安堵に対する罪悪感などを赤裸々に語っていただきました。その後再度避難した飯館町のコンビニで遭遇した自衛隊の大型バスがなぜか

被災地ではなく西に向かっていたこと、バスには空席もあるのに乗せてもらえなかった時に頭に浮かんだ「棄民」という言葉。そのバスが被災者を救助するためではなく、原発から避難するものであったことは後で知ったとのことです。

南相馬に戻った後、自分と子ども達

の将来を知るために、2012年にはチェルノブイリに行き、ホールボディカウンターでの測定やチェルノブイリ周辺の人たちは事故後どうやって暮らしているのかを調べ、やれることを全てやってこの地に残ることを決意されました。それから原発事故の語り部として12年間、自分を抉り出すようにして経験したことを話す、それはとても辛く苦しいことではあるが、伝えなければならぬし、本気で話さないと聞いてもらえない、という気持ちで続けてこられました。先日の能登半島の地震で「東北の震災を思い出してください」というテレビのアナウンスがとても辛かった、それは、あれだけの被害を出し多くの人の生活を壊した震災・原発事故がもう人々からは忘れられていることを目の当たりにしたからだそうです。それが、原発事故の経験を語る一般社団法人を

立ち上げるきっかけとなり、被災者それぞれの思いと迷い、

行動があったことを伝えていきたいとの決意をお話されました。

第2部からは、原発事故の避難者であり、保養活動の主催者でもある鹿目久美さんも参加していただきました。

子どもをとにかく守りたい、その思いで2年しか住まなかった家を後にし、実家のある神奈川県への避難を決意した。原発事故に遭遇した子どもたちの傷を知ってもらい、その傷ごと守ってもらいたい。子どもたちは大変なお母さんを目の当たりにして、「いい子症候群」になってしまい、反抗期を経験しないまま成長している。保養はそんな子どもたちが外に出る勇気を与え、お母さんが笑顔になっていることをきちんと子どもたちは見ている。また、原発事故で避難したがまた福島に戻った人、そのまま避難して移住した人、それぞれの思いがあることにも思いを馳せてほしい、とお話されました。必要なのは「心の復興である」との言葉に深く共感させられました。

高村さんから、福島県内の学校の先生自体が震災を知らなくなってきたこと、東日本大震災原子力災害伝承館には、連日たくさんの方々が来館するが、語り部の話を聞くには会場が狭くしかも予約制で有料のため、多くの来場者がその話を聞かないで帰ってしまい、原発事故を経験した人たちの生の声を聞く機会を逃してしまっている状況も教えていただきました。

来場された皆さんからは

● 高村さんのお話で、伝承館の語り部との違いを初めて知りました。二部のお二人の話で保養キャンプの重要性と、ジレンマも深く心に突き刺さりました。

● あの日のことを、自分の被災体験・帰宅困難を思い出した。でもあの日だけで済んでいた自分は忘れることができていたが、ずっと終わらずに背負い続けなければならない方の、それも母親の立場からの話が聴けて忘れてはいけないうちと再確認しました。

● ご本人からお話をお聞きしたのは初めてでした。子どもの歳も近いので想像しながら聴いていました。「被災者」とひとくくりにならないそれぞれの想い、広げていっていただきたいです。保養プロジェクトは福島の子どもたちが外に出るとき背中を押すことになり、という話は、日々の皆さんの様々な活動をしている大きな励みになると思いました。

などの感想をいただきました。

当法人としても、保養活動と原発被害者の方の声を伝えていく講演会活動の重要性を再認識させていただきました。今後とも皆様のご協力をお願いいたします。

(伊丹高)



福島に保養の資料室を作ります



準備中の保養資料室

一年と少し前のある日。ほよよん(保養をすすめる関西ネットワーク)の運営会議を、たこ焼きキャンプの実施地の一つの神戸須磨の家で行っていました。その家には、これまで私が集めていた全国や関西の保養団体の報告集やファイイル約20冊等を置かせてもらっていました。が、その家を近々退去することになり、資料を預かってくれるところがないだろうか、と話をしたのが、この資料室の計画の発端でした。聞けば、メンバーの家にも、同じような資料が溢れかえっていて、中にはすでに処分してしまっただ、という人も。

公的支援がほほない中、全国の市民団体がそれぞれ努力しながら、個人的でユニークな取り組みをして、保養を求める被災地の人たちを励ましてきた貴重な活動…その記録が廃棄・散逸される前に残しておきたい、という話から、

ここに保養の資料館のようなものを作ったら? できたら福島がいい!と話が弾み、それがこの度、本当に実現することになりました。双葉町に福島県が東日本大震災・原子力災害伝承館を作りましたが、それに対して市民が草の根で取り組んできた被害回復の記録の展示・紹介する施設が生まれています。その一つが、いわき湯本の温泉宿「古滝屋」に開設された「原子力災害考証館 furusato」です。古滝屋のご当主に、旅館の一室を保養資料室として使わせてくださいとお願いしたところ、なんとOKがもらえ、開設を進めることになりました。

その名前も、展示内容が伝わると同時に、誰にでも来てもらいやすい柔らかい雰囲気、という事で「子どもと原子力災害 保養資料室 《ほよよん》」と決めました。《ほよよん》は、ほよよんさんのホームページや出版書籍「子ども、いつ会える?—原発事故後の子どもたちと、関西の保養の10年」を可愛く飾る保養のイメージキャラクターです。小さな空間ながら、説明のパネルや保養の写真、報告書等に加え、保養中に子どもたちが書いた文章や作ったものなども展示できないか、と夢を



子どもと原子力災害 保養資料室 《ほよよん》

いわき湯本温泉 古滝屋
福島県いわき市常磐湯本町三函208 9F 三番茶屋
ホームページ
<https://hoyoushiryoshitsu-hoyoyon.jimdosite.com/>



保養資料室《ほよよん》を育てる会
代表 宇野田陽子
メール hoyoyonshiryo@gmail.com
電話 090-9871-1419 (小野)

※資料の提供、サポーター募集についての詳細はホームページまたはメール問い合わせで。
※展示は一部しか完成していませんが、順次「育てて」いきます。

広がっています。単に展示や保管にとどまらず、この場が未来の世代につながる相互交流の場として機能するような取り組みも模索しています。運営主体として「育てる会」を立ち上げ、とありあえず3年間この資料室を維持し、発展させることにしました。3月末にプレオープンし、更に資料を収集・整理し、サポーターを募集して、《ほよよん》を育てていきます。

保養活動のつながり、ひろがり

首都圏保養交流会の報告

福島第一原子力発電所の事故後にスピード感をもって立ち上がった全国各地の保養活動は、集まったメンバーの手探りで個性豊かに展開されていきました。各団体は様々な問題にもぶつかることになり、他の団体はどのようにしているのか知りたいと考える声があがるようになりました。首都圏では、中野区の「なかのアクション」の呼びかけで、4区交流と銘打ち、世田谷、杉並、中野、練馬が合同で交流会を始めました。交流会は最初から時間が足りないくらい熱心だったことを覚えています。資金集めや募集方法、子どもたちの年齢、親たちとのつながり、開催場所、そして保養キャンプの内容など、すべてが異なっていて、互いの違いに驚いたり感心したりしました。

さらに交流を広げて学びあいたいと、つながりのできた団体によびかけて「首都圏保養交流会」としてメーリングリストを作り、年1回程度、交流会や学習会を開催し、コロナ禍でもオンライン交流会を行ってきました。この日の参加団体は以下の通りです。
● 福島の子どもたちとともに・世田谷の会
● なかのアクション (中野)
● はちみつ會 (町田)
● ぽかぽかプロジェクト (FOE Japan)
● 自由学園全国友の会
● 福島の子どもたちとともに・湘南の会
● 福島の子どもたちとともに・川崎市民の会
● 福島の子どもたちとともに・平塚の会
● たこ焼きキャンプ (兵庫)
● NPO法人福島子ども保養プロジェクト@練馬

誌面の都合で出た意見を少しだけご紹介いたします。
水保長崎スタディツアーと一緒に行った福島のお母さんの言葉「長崎は78歳、水保は60歳、私たち福島はまだ12歳。辛いことは自分だけではない。まだまだ話せなくても仕方がないんだと気づいた」と。語り継ぐのはこれからだ。コロナで活動が途切れ、東京に呼びこへの危機感もあり現在は寄付での応援活動をしている。小学生を呼び活動から親子で来てもらう活動に変更。福島に向いて同窓会をしたら盛況。以前参加した子が成長して東京に就職・受験に来た時の交通費援助。コロナ後は福島での保養に補助をする活動に変更。若い世代にお菓子を作りながら焼きあがる時間に甲狀腺がんの学習会を開催。保養のニーズに悩む。現地の伝承館等に行き学びを深めている。コロナ後、関西では半数が休止、半数が再開。募集に活用していた「全国相談会」がなくなったので自分たちで相談会を計画。

復興政策の中で、福島の子どもたちは伝承館などで原発推進の立場の学習をしているが、不安だ。伝承館も不十分なところはありますが、丁寧に伝えてつながっていくことが必要。《ほよよん相談会》のサイトは継続しているの、募集に活用できるので、裁判や保養の資料を残していないといけない。
保養団体にとっても、コロナ禍の影響は大変大きいものでした。しかしそのさなかにも、オンラインを活用してつながりや新たな展開を模索し、参加した子どもたちへの援助を始めるなどの、現地での学びを深めるなどの他団体の活動に触れることができたのは大きな収穫でした。数年ぶりにお顔をみた他団体のメンバーと「久しぶり」と笑顔でもりあがったり、初参加の団体とも忌憚なく交流できるのは、「保養」への思いが共通にあるからだと感じました。

(大城資子)

佐々木真理

チェルノブイリ事故から間もなく38年となりますが、現地ではいまま事故の影響と思われる病気に苦しむ子どもたちがいます。「チェルノブイリ子ども基金」は1991年設立以降、チェルノブイリ事故被災地の子どもたちへの救援活動を行っています。1996年からは毎年、ウクライナとベラルーシの病気の子どもたちのための保養プロジェクトを行っています。一定期間であっても、汚染の少ない地域で安全な食べ物を食べ、さまざまなストレスから解放されて過ごす保養は、子どもの健康維持や回復に有益であると評価されています。

しむ人々は、戦禍による二重三重の苦しみを負っています。また、私たちの活動にもさまざまな影響が出ています。戦争が始まってから、長年のパートナーであるウクライナのNGOや、これまでつながりのあったウクライナの人たちと連絡を取り合いながら、出来る限りの支援を続けています。

昨年7月には、戦争が続く中、ウクライナ西部の山岳地帯にある子ども施設で、放射能汚染地ジトーミル州ナロジチとオウルチ地区に住む病気の子どもたち30人が保養をしました。また甲状腺の患者の治療を行っている病院と、放射能汚染地の病院に対し、医薬品の支援をしています。

2022年2月のロシア軍のウクライナ侵攻により、私たちが長年支援してきたチェルノブイリ事故被災地に暮らす子どもたちや今も被害に苦しむ人々は、戦禍による二重三重の苦しみを負っています。また、私たちの活動にもさまざまな影響が出ています。戦争が始まってから、長年のパートナーであるウクライナのNGOや、これまでつながりのあったウクライナの人たちと連絡を取り合いながら、出来る限りの支援を続けています。



ベラルーシの子ども保養施設「ナデジダ」で開催した書道教室にて(2019年)



東日本大震災直後、数々の市民グループが会合に使ってきた練馬駅前の喫茶店「アンデス」に集まり、私たちは相談した。あれもこれも物資のない中、女性の日用品・義援金を福島に送ろうと。「ねりま被災地の女性たちを支援する会」が誕生した。練馬のドラッグストアの棚もガラガラで、生理用品・使い捨てカイロなどを求めて自転車で行き回った。

6月、初めての抗議デモを企画。雨の中ベビーカーを押して参加した人たちとの出会いは「福島子ども保養プロジェクト」へとも繋がって行った。その後、「支援する会」のメンバーを中心に、脱原発への長期的な活動を目指す「核・原発のない未来を子どもたちに@練馬」を結成した。

9月11日に「佐藤栄佐久前福島県知事講演会」を開催したのを、皮切りに、数々の上映会や講演会を企画してきた。とくに、福島原発告訴団の団長の武藤類子さんには、何度も来ていただいて「福島のない未来」を語っていただいている。聞くだけでなく、「福島バスツアー」を開催し、マスコミが伝えない福島を体感している。また、「東電株主代表訴訟」「311子ども甲状腺がん裁判」などの傍聴に行っている。夏季休暇中などの裁判だと若い方も来ているが、私たちはウィークデーを有効活用して霞が関に足を運んでいる。年代による守備範囲の違いもあるので、特に会の若返りを目指す必要もないだろうと言うのは私見だが、「倦まず撓まず1歩ずつ」というのが会の合言葉。*「アンデス」は2020年8月、閉店した。

石川博美

10年目を迎えた「滞在型保養ハウスさかさい」

2014年1月にオープンした「滞在型保養ハウスさかさい」は今年10年目を迎えました。

オープンしてから、私たちの団体に信頼を寄せて自由な運営を見守って下さったオーナーに、心から感謝申し上げます。

年間を通じて希望するときにいつでも滞在していただけるスペースです。夏のキャンプ以外でも好きな時に思い思いの目的で利用できるのりでピーターの方も多いです。現在までに139家族719人のご利用がありました。

利用の際の迎える時に、東京近辺のレジャー施設に行くことを心待ちにしていることも私たちの笑顔を見るたびに、嬉しくなります。また、福島への送りの時には、「楽しかった。また来たい」という言葉をもらい、今後の活動の励みになります。

昨年度、練馬区社会福祉協議会のスタッフが見学に訪れ、その後、3月に区内にいらつしやる避難者の方を囲んでお茶会を開きました。その方は2021年2月に開催した「震災・原発避難者はいまPART6」で福島島のいまを語る・10年を唄うに参加され、

「コロナが終わったら「さかさい」の草取りをしたい」と私たちに声掛けしてくださいました。あれから2年がたち、やっとコロナも収まりつつある2023年に「練馬から南相馬の集い実行委員会」の方にもマッサージュで参加していただき、和やかな会となりました。

土いじりが好きとのことと、「さかさい」の庭をご覧になって草取りをしましょう、とのご提案をいただき、社協のスタッフ2人、当団体から4人で5月晴れのある日に草取りに精を出しました。気持ちの良い汗をかき、庭もすっきりきれいになりました。ご一緒に体を動かすことで気持ちも少しづつ打ち解けられ、ご自分の故郷で2011年3月11日にどうやって被災されたかのお話をされました。そのときの絵本も紹介されて、自分の体験をお孫さんに読んでもらいたいのだという想いを話されました。

夏に、また草取りをしましょうかと提案されましたが、私たちが夏の保養キャンプの準備でスケジュールが合わず、11月にガーデンニングとお茶会を、社協のスタッフ3人、当団体から3人で開きました。せつせと穴を

掘り春に咲く球根を植えていく作業にすっかり夢中になり、植物の話に興じました。今度、牧野庭園に行きたいですねと次の計画を楽しそうにお話されました。

区内に住んでいらつしやる避難者の方も高齢化が進み、なかなか外へ出られない方が増えていると聞いています。「さかさい」が気軽に集える場所になればよいなあと願っています。少々交通の便が悪いので実現するには工夫が必要かなとも考えています。

2月には、練馬区社会福祉協議会主催「避難者支援団体連絡会」今年度第3回目を「さかさい」で開く予定です。各避難者支援団体に『こんなにくつろげる(滞在型保養ハウスさかさい)を紹介したい』という社協スタッフからの要望で実現します。

これからも、ますます福島からの利用者や避難者の方々がつながる場として利用されることを願ってやみません。

(安東洋子 青木節子)



避難者の方と球根植え



保養ハウスさかさい

ニュースレター第七号をお届けします。

今号の巻頭言は、第一回の保養キャンプから中心に関わり、NPO法人福島こども保養プロジェクト@練馬の最初の代表理事を担った竹内尚代さんが書いてくださいました。竹内さんは、松本に移住されてからも、引き続き法人理事として毎月の定例会にズームで参加してください、これからもこのニュースレターで松本での活動の様子もお知らせいただけるということです。

また、今号も講演会「震災・原発避難者は今」の報告を掲載しました。この講演会も今年で九回目となりましたが、講師の高村美春さんの話は、あらためて震災・原発事故被害の体験の過酷さを伝えるものでした。また、その体験を「伝承（継承）」していくことの大切さを確認するものであり、高村さんが鹿目さんと共にそのための新しい事業を始められることを応援していきたいと思えます。四ページで兵庫の小野さんが紹介してくださってる「子どもと原子力災害 保養資料室《ほよん》」設立も、そのような新たな「伝承（継承）」の動きです。私たち保養プロジェクト@練馬も、この資料室には是非協力していきたいと考えております。

そして、そもそも私たちが保養活動を始めたのは、チェルノブイリ原発事故後の保養活動から継承されたと言えると思います。今号では、その「チェルノブイリ子ども基金」の現在の活動を紹介することができました。

チェルノブイリでも福島でも、子どもたちの健康が害され、今も保養活動が必要とされております。これからも、私たちの活動の支援をよろしく願います。

(中川信明)

p6より

2024年チェルノブイリ救援カレンダー

「子ども基金」は毎年救援カレンダーを制作・販売しています。私たちの支援による保養に参加した子どもたちの写真で構成されています。子どもたちに平和な日常と本当の笑顔が一日も早く戻るよう願いを込めて作りました。収益はチェルノブイリと福島原発事故により被災した子どもたちの救援金にあてられます。申込先: chemo1986@jcom.zaq.ne.jp



カレンダー表紙

チェルノブイリ子ども基金ニュースレター

年3回発行、活動報告を掲載しています。最新号 No.127 は 2024年2月16日発行 HP からご覧いただけます。 <http://ccfj.la.coocan.jp/>



2024 ニュースレター NO.7

2024年3月発行

NPO 法人福島こども保養プロジェクト@練馬

〒178-0063

東京都練馬区東大泉 6-36-4-301 大城資付

ホームページ: <http://www.hoyounerima.org/>

Eメール: info@hoyounerima.org

Facebook: 福島こども保養プロジェクト@練馬

<https://www.facebook.com/hoyounerima/>

寄付はこちらまで

郵便振替口座 00100-4-300449

加入者名 福島こども保養プロジェクト@練馬

HP

Facebook

E-mail



2023年度 会計報告 2024年1月31日現在

収入		支出	
会費	180,000	保養キャンプ	1,286,211
寄付金	601,579	保養ハウスさかさい	97,239
助成金等	1,596,000	講演会	95,136
講演会収益他	21,500	ニュースレター	164,613
その他	40,886	相談会	2,270
		会議費用他	195,350
計	2,439,965	計	1,840,819
収支差額			599,146

表紙題字/竹内尚代 編集/青木節子、大城資子、中川信明

デザイン・DTP・ロゴマーク/柳 裕子

写真提供/生田美樹、伊丹 高、大城資子、小野 洋、佐々木真理